

## ナショナルな神話と集合的想像域

### Mythe national et imaginaire collectif

丹羽 卓  
NIWA Takashi

本稿は、日本ケベック学会 2018 年度年次大会でのジェラルド・ブシャール教授の基調講演 « L'état des mythes nationaux sous l'impact de la mondialisation » (本誌に収録) に先立って、本稿の筆者が行った「基調講演の前に」と題した導入的解説に加筆修正したものである。

ブシャール教授の基調講演は、教授の著書 *Raison et déraison du mythe. Au cœur des imaginaires collectifs*, (Boréal, Montréal, 2014) に基づき、それを発展させたものである。本稿も、*Raison et déraison du mythe* の中心概念であり、本講演でもそうである「集合的想像域」(imaginaire collectif) と「神話」(mythe) に焦点を当てて説明する。

#### 1. 集合的想像域と表象

まず imaginaire collectif という概念であるが、これはブシャール教授の書物 *Genèse des nations et cultures du nouveau monde. Essai d'histoire comparée* (Boréal, Montréal, 2000) においても使用されていて、その邦訳『ケベックの生成と「新世界」—「ネイション」と「アイデンティティ」をめぐる比較史』(竹中豊監修、丹羽卓監訳、立花英裕、古地順一郎他訳、彩流社、2007) では、「集合的想像域」と訳されており、「翻訳にあたっての注記」(p. 4) の (4) に次のようにある。

——imaginaire collectif は『集合的想像域』と訳した。(…)それはある集合体が、心情的に深い共有意識をもち、独自の内的世界を形成した状態をいう。原著者自身の定義によれば、「ある集合体が、それ自身とそれと区別される他者を定義する際に用いる表象の総体」ということになる。

集合的想像域とは、ある集団が共有する表象の集まりであり、その集団の規模も家族などの小さなレベルから始まり、何らかの社会集団や組織のレベル、さらにはネイションのレベルなどさまざまであるが、本稿では、講演とかかわりの深いネイションの集合的想像域と集合的表象に話を絞って説明する。

- (1) 集合的想像域を考えるにあたっての第1点は、それは心的なものであるということである。集合的想像域は、狭義の理性というよりも、心的あるいは感情的なものにかかわる。理屈で教え込まれるというより、心の奥深くに根差す。ネイションの構成員は、一方で、社会規範、伝統、物語、アイデンティティといったものを言語化した形で持つが、他方でなんらかの象徴的構造を心の奥深くで共有する。そしてその両者を結ぶ絆となっているのが集合的想像域なのである。
- (2) 第2点は、集合的想像域はただの表象の集まりではなく、その表象は何らかの権威を得たものでなければならない。あるネイションが体験した重要な事件、特にそのネイションにとっての「動かない基準点」(anchorage)と呼ばれる重大な事件（戦争の勝利、敗北、革命など）のもたらす非理性的な感情（たとえば優越感とか恥辱とか）が、そうした表象に権威を与える。それゆえ、集合的想像域は、理性による部分もあるが、多分に心的・感情的な面が強いのである。

具体例を挙げて説明しよう（これはブシャー教授の例ではなく、筆者が説明のために準備したわかりやすい例である）。客観的に見れば、年間365日どの日も特別なわけではないはずだが、ネイションはそれぞれ「記念日」というものを設けている。たとえば次のようである。

- 7月1日 カナダ・デー (Canada Day, Fête du Canada)
- 7月4日 米国独立記念日 (Independence Day)
- 7月14日 フランス大革命記念日 (Fête nationale du 14 juillet)
- 6月24日 ケベックのナショナルな祝日 (Fête nationale du Québec)

7月1日のカナダ・デーは連邦形成を記念する日で、休日で式典が催される。1867年7月1日に英国議会で英領北アメリカ法が制定され、今のカナダのもとになるカナダ自治領が誕生したからである。7月1日はカナダ・ネイションにとっては特別な日で祝日だが、他ではそうではない。3日後の7月4日はアメリカ合衆国の独立記念日である。1776年7月4日に独立宣言が採択されたのを記念するこの日も、他では特に価値がない。7月14日はフランスの革命記念日で、フランス革命の発端となった1789年7月14日のバスティーユ監獄襲撃とネイション結末の象徴として翌年同日に行われた連盟祭を起原とする。この日もフランス・ネイション以外には特に意味はない（日本で毎年この日に催される「パリ祭」はもちろん性格が異なる）。このように、ネイションによって年間のどの日を特別扱いするかは異なり、そして、記念日はどの日でもいいという訳ではない。その背後には「連邦を形成した」とか「独立した」とか「革命を起こした」という重大な歴史的出来事が必要なのである。それらに比べて、ケベックの祝日である6月24日は事情が少し違う。この日はローマ・カトリックの聖ヨハネの日であり、聖ヨハネはケベックの守護聖人である。このケベック・ネイションの祝日が表象するのは過去の特定の出来事というより、ケベックがその存立の基盤としている歴史的・文化的事実であろう。

つまり記念日はある集合体が体験した過去の事実の集合的表象だが、そこにはその歴史的出来事への集合体による意味付けがあり、それが繰り返して記念されるだけの価値があるとされるものでなければならぬ。つまり、記念日は歴史的出来事の表象であるだけでなく、それが表している価値の表象でもあるのである。

もちろん表象は記念日だけではない。カナダを例にとってもう少し考えてみよう。カナダにとって「北」というイメージも集合的表象であり、それは「南」の米国との差異化に重要な働きをする。世界に先駆けて表明した「多文化主義」もそうである。「平和維持活動」や「人権」とかもそうだろう。他にもいくつも挙げられるであろうが、そうした集合的表象が集まってカナダ・ネイションの集合的想像域ができあがっている。そしてそれがカナダ・ネイションのアイデンティティの基盤となり、伝統として語られ、社会的規範として人々

を律することになるのである。

- (3) 第3点は、集合的想像域は表象がただ集まっているだけではなく、構造を持っていることである。表象の中にも中心的なものと同縁的なものがある。そして中心的なものの中でも特に重要なのは、「超越的な集合的表象」(représentations collectives surinvesties) と呼ばれる他の表象を超越する表象で、例えば次のようなものがそれにあたる。

- 南アフリカ共和国での人種平等
- フランスでのシティズンシップの基礎となる権利の普遍性と平等
- 英国での個人の自由
- 米国での所有権
- ケベックでのフランス語への執心とケベックがネイションであるとの自己認識

これらはそのネイションを構成する人々の精神に「刻印」(emprise) となって支配力を及ぼす価値や信条であって、通常それへの異議申し立てはなされず、それを疑問視するなど冒涇とみなされる。こうした価値は神聖であり、触れてはならない。こうした表象がネイションの多くの構成員の心の中にあって、ネイションを結び付けているのである。

似たようなオーラをまとったネイションの集合的象徴がある。たとえば、戦闘の場や軍人墓地は聖域とされる。無名戦士の墓は瞑想へと人を導く。祖国に身を捧げた英雄の記憶は侵さざるべきもので、これらを冒涇することはタブーなのである。

- (4) 第4点として、集合的想像域の構造は、必ずしも首尾一貫しているわけではないということがある。むしろそんなことは稀であって、いくつかの有力な表象が矛盾を孕んだ形で共存するのがよく見られる。また、時の流れとともに、周縁的表象だったものが支配的な表象に取って代わることもある。つまり、集合的想像域は構造化された(結晶化した)ものでもある一方、また変化するものでもある。それゆえ、基調講演で述べられるように、ネイションの集合的想像域(特にその中心をなす神話)がグローバル化の時代に変容するこ

ともあるのである。

- (5) 第5点目は、集合的想像域を培う源泉は多様であって、知識人文化が議論によって生み出すものもあれば、大衆文化の儀式化された産物（伝統や信仰）もある。

## 2. 神話

次にもう一つの重要な概念である「神話」に話を移そう。一般にこの語はさまざまな意味で使われているが、ブシャール教授は、神話とは「何らかのメッセージ——価値、信条、願望、究極の目的、理想など——を担う集合的表象」と捉える。神話もまた集合的表象の1つであるが、単独の表象というより、いくつもの重要な表象を組み合わせた言説であり、その神話を持つネイションの基本的価値を表現するものである。集合的想像域の中心を占め、非常に重要なのである。

神話は、個人を越えたレベルで、社会の歩みに次のような強い作用を及ぼす。

- (1) 住民の集合体への帰属意識を掻き立てるような象徴的基盤を提供する。
- (2) イデオロギーと連帯感を強化し、特定の目標や目的の下に社会を集結させる。
- (3) 社会の緊張をうまく処理し、その裂け目を埋め、危機や精神的ショックの後に再結集して再び力強く活動する手段を担保する。

神話はあらゆる文化の中心に存在し、理性的というより感情的なもので、人々を動員したり、大胆な企ての追及へと突き動かしたり、逆に抑制したりして、その選択と行動の動因となる。その神話についてブシャール教授は次のように言う。

- (1) 神話は空想でもなければ人を惑わす危険な言説でもない。
- (2) 神話は前近代的なものではなく、現代社会でも強力な装置である。
- (3) 神話についての過去の社会学研究は不十分だった。
- (4) 神話の誕生、再生産、置き換えを統御する要因と過程について問うのが喫緊の課題である。

## (5) 社会的神話のオリジナルな分析モデルを提案する。

神話には、良きに付け悪しきにつけそこには基本的価値にかかわるメッセージを見出すことができるが、たとえば、ブシャー教授は神話の例として次のようなものを挙げている。

- 人種に階層があるという神話
- 神に選ばれたがゆえにモデルとなる優れたネイションであるという神話
- 原理主義を基礎づけ、暴力へと誘う神話
- ヒューマンイズムの基礎となる神話

ここでまた、筆者なりのわかりやすい例を挙げよう。たとえば、米国には「アメリカン・ドリーム」という神話がある。それは米国には、独立当時のヨーロッパのような身分差別はなく、「機会は均等にあたえられるので、努力して自分の能力を生かせば成功を勝ち取ることができる」というメッセージが込められている。この神話が表わす価値としては、「デモクラシー」「人権」「自由」「機会の平等」などがあげられるだろう。しかし、アメリカン・ドリームという神話は現実ではない。アメリカン・ドリームは米国に多くの移民を引きつけたが、ほんのわずかな人々がそれを実際に体験できたにすぎない。それでも、この指導的神話が数百年にわたって米国人を支え、導いてきたのは事実である（しかし、基調講演の中でも触れられているように、アメリカン・ドリームの神話は今衰退しつつあると考えられる）。

以上のことからわかるように、神話を分析すれば、それを含む集合的想像域にどのような理想があり、そのネイションが何を価値として認めているのか、どのような願望を抱いているのかがわかる。

神話については基調講演でさらに詳しく具体的に語られたので、ここでこれ以上書くのは控えたい。神話がどのような特徴を持っているのか、神話化のプロセスはどのようなものなのか、神話がどのような構造をしているのか、神話はどのような機能を持っているのか、どのように変化するのか——ブシャー教授は、こうしたことの説明をされたうえで、具体的に世界各地のネイションの現状を取りあげて、それらがグローバル化のもとどう姿を変えているのかを詳しく描かれた。

本解説は基調講演の理解の助けになるように願って準備した導入的解説であって、基調講演そのものの解説ではないので、基調講演の内容については、本号に掲載されているブシャール教授の講演原稿を直接お読みいただきたい。筆者としては、本稿がその一助になれば幸いである。

(にわ たかし 金城学院大学教授)